

デカルトにおける pronuntiatum と propositio との区別によるコギト解釈

著者	田村 歩
雑誌名	筑波哲学
号	23
ページ	173-177
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	L'interpretation du COGIT0 par la difference entre 'pronuntiatum' et 'propositio' chez Descartes
URL	http://hdl.handle.net/2241/00128928

【修士論文研究ノート】

デカルトにおける「*pronuntiatum*」と「*propositio*」との区別によるコギト解釈

田村 歩

【目次】

1. 問いの所在
2. 「認識」ないし「真理」としてのコギトと「命題」としてのコギト
 - 2-1. テキスト分析
 - 2-2. 補足——「真理」と「認識」との関係について——
3. 他者への配慮としてのコギト
 - 3-1. 『方法叙説』・『哲学原理』と『省察』とにおける他者への配慮の相違
 - 3-1-1. 『方法叙説』と『哲学原理』とにおける他者への配慮
 - 3-1-2. 『省察』における他者への相違
 - 3-1-3. まとめ
 - 3-2. 「命題」としてのコギトと他者への配慮
 - 3-3. 結語
4. 「私は在る、私は存在する」という「*pronuntiatum*」
 - 4-1. 「*pronuntiatum*」としてのコギトの真理根拠の特異性について
 - 4-2. 「*pronuntiatum*」としてのコギトと〈時間性〉
 - 4-3. 結語

以下の引用は本論文で最も重要なテキストである。

「[...] 私が自らに何かを説得したのであれば、私はたしかに存在したのである。しかしながら、いま誰か知らぬが、極めて有能で狡猾な欺き手がいて、策をこらし、いつも私を欺いている。それでも、彼が私を欺くのなら、疑いもなくや

はり私は存在するのである。欺くならば力の限り欺くがよい。しかし私が自らを何ものであると考えている間は、決して彼は私を何ものでもないようにすることはできないであろう。このようにして私は、すべてのことを存分に考え尽くしたあげく、ついに結論せざるをえない。「私は在る、私は存在する」というこの「*pronuntiatum*」は、私がこれを言い表すたびごとに、あるいは、精神によって捉えるたびごとに、必然的に真である、と」(Medit., AT-VII, 25.)

ここでは「*pronuntiatum*」を取って訳出しなかったが、研究史を省みる限り、これは「命題」と訳されるのが常であった¹。しかしマリオンが指摘するとおり、「*pronuntiatum*」から「*proposition*」への変更は改悪である。デカルト形而上学の第一原理であるコギト(本論文で「コギト」という場合、「*je pense, donc je suis; ego cogito, ergo sum*」に限らず、「*ego sum, ego existo*」や「*dubito, ergo sum*」とも表されるような、自らが思惟するということから導き出される〈私〉の存在を意味するものとする)に対しては「*vérité*」、「*pronuntiatum*」、「*cognitio*」、「*proposition; propositio*」といった様々な語が当てられており、デカルトは議論の文脈に応じてこれらの語を明確に使い分けているのである。しかしこれまでの諸研究のうち、デカルトの文献に忠実に、彼がコギトにいかなる語を当て、語の相違によって彼が何を意図していたのか、またある語が当てられている箇所は他の語が当てられている箇所と文脈的にどのような差があるのか、を明確にしたものは未だ存在しないと思われる。よってこれらを明らかにすることが本論文の課題である。そのためには第一に、コギトに対する語の使い分けによってデカルトが何を意図していたのかを明らかにし、そして第二に、先の点を踏まえ、なぜ『省察』では「*propositio*」ではなく「*pronuntiatum*」という語が用いられたのかを明らかにしなければならない。

本論文では以下のことが解明される。

第一に、『方法叙説』や『哲学原理』において、「私は思惟する、ゆえに私は存在する」(以下コギト)ということばが、それが発見される箇所とその後再度反省的に言及される箇所との二箇所で見られるということ、そして、それぞれの箇所での呼び名が変えられており、発見される箇所においては「真理」ないし「認識」と呼ばれ、発見後に再度言及される箇所においてはそれぞれ「命題」と呼ばれているということが、テキスト分析によってただちに明らかにされる。この点に鑑みて、最確実なものとして最初に知られるコギトを、デカルトは、「命題」としてではなく「真理」ないし「認識」として受け入れたということが理解される。言い換えれば、デカルトがコギトを

「命題」として定立するのは、両著作とも、それが「真理」ないし「認識」として得られたのちに、その確実性が何に基づくのかを再度反省的に考察している文脈においてのことなのである。

第二に、『方法叙説』、『省察』、『哲学原理』における〈他者〉すなわち〈読者〉への配慮の相違が明らかにされる。これらの書物に記された思索を比較・検討するためには、まずもってその思索が記されたところの書物それ自体の性格を明確にしておかなければならない。そして本論文では〈他者〔読者〕〉への配慮という観点からこれら書物の性格を論じ、結果、デカルトがコギトを「命題」とみなすのは、〈他者〔読者〕〉への配慮が明確に表されている限定的な文脈においてである、ということが示される。

第三に、『省察』におけるコギトは決して「命題」とみなされるべきではないという点が指摘される。「第二省察」では「私は在る、私は存在する」というこの«*pronuntiatum*»は、私がこれを言い表すたびごとに、あるいは精神によって捉えるたびごとに、必然的に真である」と主張されるが、この«*pronuntiatum*»という語はこれまで「命題」と訳されることが常であった——当時デカルト自身の校閲を受けたとされる仏語版『省察』においてでさえ、これが「命題〔*proposition*〕」と訳されているのである——。しかし、すでに第一・第二の議論において、デカルトがコギトを「命題」とみなすのは〈他者〔読者〕〉への配慮が示された文脈に限定されているということが明らかにされているし、また『省察』所収の『反論』においてホッブズやガッサンディが「私は存在する、という命題〔*propositionis, Ego existo*〕」(3ae Obj., AT-VII, 173.)や「私は思惟するものである、という命題〔*propositionis, Ego sum res cogitans*〕」(5ae Obj., AT-VII, 277.)と記している一方で、デカルトはそれらに対する『答弁』でもそのような表現は一度も用いていないということから、コギトに対して彼は「命題」という語の使用を避けていたのではないかと考えられる。そして、たとえば数学や幾何学に関する「命題」の真理性はそのものうちにあるといえる一方で、「私は在る、私は存在する」の真理性は、これを自らが言い表し、自らの精神で捉えることのうちにある。言い換えれば、「命題」の場合、それを、それが発せられる主体や状況から切り離すことが可能であるが、「私は在る、私は存在する」の場合、それを、今まさに懷疑を遂行している〈私〉という主体とその〈私〉が立ち止っている懷疑の限界点という状況から切り離すことはできないのであって、このような真理根拠の特異性が«*propositio*»との区別によって浮き彫りとなるのである。

加えて、コギトにおける「私がこれを言い表すたびごとに、あるいは精神によって捉えるたびごとに」という時間性に鑑み、数学的真理と同様にコギトも神による確実

性の保証があって初めて「学知」たりうるというベイサッドの説が否定される。第一に、〈私〉の存在は決して普遍的ではなく、「私は在る、私は存在する、これは確実である。しかしどれだけの間か。もちろん、私が思惟する間である。なぜなら、もし私が思惟することを完全にやめてしまえば、おそらくその瞬間に私は、存在することをまったくやめてしまうことになるであろうから」(*Medit.*, AT-VII, 27.) という主張は、神の存在と誠実性とが論証されたのちにも変更されることはない。第二に、同じく〈私〉の存在は必然的でもなく、「私は在る、私は存在する」というこの「*pronuntiatum*」は、私がこれを言い表すたびごとに、あるいは、精神によって捉えるたびごとに、必然的に真である」といわれる場合、「私は存在する」は真である」ということが必然的なのではなく、「私は存在する」は「私がこれを言い表すたびごとに、あるいは精神によってとらえるたびごとに」真である」ということが必然的なのである——「私がこれを言い表すたびごとに、あるいは精神によってとらえる」をここでは「私は思惟する」と等価であるといつてよいだろう——。つまり、「私は思惟する」と「私は存在する」との結合は普遍的で必然的であっても、「私は思惟する」や「私は存在する」は普遍的でも必然的でもないのであるⁱⁱ。だからこそデカルトは「もし私が思惟することを完全にやめてしまえば、おそらくその瞬間に私は、存在することをまったくやめてしまうことになるであろう」と主張しえたのではないか。「私は在る、私は存在する」は、「私がこれを言い表すたびごとに、あるいは精神によってとらえるたびごとに」ないし「私が思惟する間」という制約を被るという点では普遍的でも必然的でもないが、しかし〈私〉は、両者の結合を普遍的で必然的なものであると認識することによって、明晰判明に関する「一般的な規則」の導出や神の存在の証明を可能にしたのである。そしてこれまでの考察が妥当であるならば、デカルトはコギトを「学知」として呈示したのでもなく、またそうしようと試みたのでもない——すなわち、コギトのうちにベイサッドのいう「学知の全時間性 [l'omnitemporalité de la science]」を見出す必要もない——と結論づけることができるであろう。

ⁱ 当時デカルト本人の校閲を受けたとされるリュイヌ公らによる仏語版『省察』においてさえ、「*pronuntiatum*」の訳語が「*proposition*」(*Meditations.*, AT-IX, 19.) となっており、この箇所に関して既存の英訳 (translated by Haldane, Elizabeth S., Cambridge: Cambridge University Press, 1911.; translated by Moriarty, Michael., Oxford: Oxford University Press, 2008. など) や独訳 (übersetzt und herausgegeben von Buchenau, Ärtur., Hamburg: Verlag von Felix Meiner, 1915.; übersetzt und herausgegeben von Wohlers, Christian., Hamburg: Felix Meiner Verlag, 2009. など) はこの仏語版『省察』を参照したものとと思われる。しかしマリオンをはじめ仏・英米の研究者の中には、「言い表すたびごとに、あるいは、精神によって捉えるたびごとに」という記述を重視し、これを「発話行為」ないし「精神の行為」とみなして「発話 [énoncé/pronouncement]」や「声明 [statement]」

とみなす者もいる。Cf. Marion, Jean-Luc., *Sur la théologie blanche de Descartes* (Paris: Presses Universitaires de France, 1981), p. 381.; Id., *Sur le prisme métaphysique de Descartes* (Paris: Presses Universitaires de France, 1981), p. 157.; Rosenthal, David M., “Will and the Theory of Judgment”, in *Essays on Descartes’ Meditations*, ed. Rorty, Amélie (Berkeley: University of California Press, 1986), p. 422.; Brown, Marshal., *Turning Points: Essays in the History of Cultural Expressions* (Stanford: Stanford University Press, 1997), p. 162.

また邦訳に関してはほとんどがこれを「命題」と訳しており、論者の知る限り「命題」以外の訳語をあてているのは所雄章訳のみである。彼はこれを「言明」と訳している。Cf. 所雄章『デカルト『省察』訳解』(岩波書店、2004年)、79頁。しかし彼がここで他の語との区別を意識していたかどうかは定かではない。というのも、彼の他の注釈書では«*pronuntiatum*»が「命題」と訳されているからである。Cf. 所雄章『デカルトII』(勁草書房、1971年)、103頁。

ii Cf. 村上勝三『数学あるいは存在の重み デカルト研究2』(知泉書館、2005年)、77-99頁。

(たむら・あゆむ 筑波大学大学院人文社会科学研究科在学)